

---

# .hack//G.U. Another World

空野翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

.h a c k / / G · U · A n o t h e r W o r l d

### 【ZETE】

Z9098H

### 【作者名】

空野翔

### 【あらすじ】

西暦2010年、決して公にならない事件が解決した。それから7年後、三崎亮という17歳の少年がそのネットゲームにログインした。実は亮にはとある秘密があり……。これは.hack//GU・U・のメインストーリーに沿いながら捏造を盛り込んだ話となっています。

## 予兆

それは我執から生まれた。

生に対する執着、死に対する恐怖。

死すべき存在が生に取り付かれ、世界に絶望した少女を捕らえた。

闇へと葬られた歴史。

影から影へと伝わる物語。

隠匿された、黄昏の碑文。

そして生まれた黄昏の女神。

女神を狩る死神に囚われしは、地母神の怒りに触れた少年。

ああ、少年に幸いあれ！

死神から解放された少年は、あまりのショックで女神にまつわることを忘れてしまった。

その7年後に、忘れられし記憶にまつわる事件が起ころるなどとは思はずに……。

地母神に魂を囚われ、死神とされて帰還した少年に待ち受けていたものは好奇の目。

神の怒りに触れ、神隠しに合つた少年。

異界の空氣を吸つてしまい、少年が感じたものは空虚。

研究者達は珍しい“サンプル”を手に入れ、嬉々としてメスを握つた……握ろうとした。

しかし……歓喜の叫びは落胆へと変わる。

少年にサンプルの価値がなくなつてしまつた。自分の身に何があつたのか忘れてしまつっていた。

これでは何があつたのか分からぬ。

少年が異界へと接していた道具は、何も知らない少年の両親によつてすでに棄てられ今は無い。

サンプルの意味が無くなつた少年は、何も知らされないまま日常へと戻つていった。

少年が嘲笑つたことに気付かぬまま。

神をも恐れぬその行為！

少年は神隠しにあつたことを覚えていた！

地母神に囚われ、魂を変質させられ、死神となつたことも…。

何かを得るためには代償を支払う。

黄昏の鍵を手に入れようとした少年が支払ったのは、自分自身。

しかし黄昏の鍵は手中に叶わず。

それは死神の代償だろうか。

それは地母神からの罰だろうか。

そして待ち受けける好奇の目。

力なき少年は『口』を探すため、己を偽ることにした。

全ては空虚を埋めるため。  
全ては見失ったものを探すため。

存在しないはずの彼が再び世界に現れた。  
死神に囚われた世界、嘘偽りに満ちた世界に。

そして彼は世界をまたさ迷いだす。

偽の中の真を探すため、自身も偽を纏い。

ただし、わずかな例外にはほんのかすかな真を告げ。

世界が炎に包まれるまで。

オレハココニイル



## 予兆（後書き）

初めまして。初投稿となります、以後お見知りおきを。  
コメント大歓迎ですが、作者が何分口下手なものなので、そつけなくともご勘弁を。

まずはプロローグです。

初めてということで手探りの状態だつたんですが……分かる人には分かってしまう内容ですよね。もちろんそのつもりで書いたんです。

それでは、次出会えることを祈つて。

## 第1話

The World R:2

その日、また新しい来訪者が“世界”に足を踏み入れた。

黒い装束に銀の髪、紅の瞳。  
職業は鍊装士。  
マルチウェポン

名前は……ハセヲ。

閉じていた目を開く。

とたんに飛び込んできたのは少し暗いドームの中。

飛び交う会話に目が回りそうになる。

やはり多いのはパーティメンバーの募集。

ハセヲはこの『世界』での感触を確かめるかのように左手首を振つた。

もちろんこれは入力された動作で、ハセヲのリアルには何の感覚もないのだけれど。

2017年になり、科学は大幅に進歩した。

リニアモーター カーも試運転間近だし、民間人宇宙飛行者ももうす

ぐ誕生しようとしている。

その中で「」のThe Worldに存在するプレイヤーはとてもリアルだ。

CGアクターが存在する現在、目の前の人もとてもポリゴンだとは思えない。

しかしそこに宿る精神というものがはあるはずではなく、どこか虚ろな印象さえ与えた。

その中で、ハセヲは笑みを浮かべる。

久しく唱えていなかつた名。

とある母から生まれた肉体なき存在。

「

」

その名はテキストに変換されることとなかった。

さあ、新しい人生の幕開けだ！

時は巡る。

生まれたばかりの赤ん坊は今や立派なレディ。

8本の鎖は千切れ、今やネットの海の中。

世界が変わつても伝わる伝説。

女神、そして黄昏の鍵。

「ない」ものを探す風変わりなギルド。

この『作られた』世界で『神々』が作らなかつたアイテムが存在するはずがない！

そう、これはまだ序章に過ぎない。

言つならば嵐の前の静けさ。

「ククク……」

自然と喉が震える。

これは狸の化かしあい。

腹を探り、騙し、裏をかき、裏切り、目的の方へ導く。

昔から何度もやつて來たことだ、それについて今更何も思わない。

ただ、今回の相手は大きい。

古い友人にして、あの楽園を出て行つた改造屋。  
左腕を拘束し、何かを隠している。

恐らくは黄昏の鍵に関係があるもの。

キー・オブ・ザ・トワイライト

さあ、掌で踊つているのは誰か？

「僕だつて、まだ舞台から降りたわけじゃないもんね！」

仲間外れだなんて許さない。

「僕を忘れてたことを後悔させたげるよ、オーヴァン！」

子供っぽい口調に紛れているか、漂わせているのは殺氣。

魔術師の人形劇が始まろうとしていた。

ならば、その人形劇を引っ搔き回すのみ。

隠されし 禁断の 聖域

グリーマ・レーヴ大聖堂

ハセラの姿は今や初めてログインした時とはまったく違う。

ジョブエクステンド。

マルチウェポン  
鍊装士のみが許された、武器を使い分ける職業。

今やハセラはレベル133の魔人、知らぬ者はいないPKK『死の恐怖』。

人を寄せ付けない刺々しい鎧に、ディスプレイ越しにでも伝わりそ

うな圧倒的な存在感。

それをひとことで言つなら……狂氣。

誰にも理解されない茨の道。  
いや、理解されることを拒否する道。

ハセヲが体験したことは常識には当てはまらないもの、世界を敵に回すこと。

誰もネットゲームが原因で意識不明になるとは思わない。  
どうせ過労とカルテに書いてそれでお終い。本当の原因は分からな  
いまま。

だからハセヲは理由を探すためにネットゲームをさ迷う。

伝説のPK<sup>トライエッジ</sup>三爪痕<sup>トライエッジ</sup>を探すため。

「どうだ！三爪痕！」

半年ぶりに会ったかつて所属していたギルドのマスター。  
ハセヲは彼のことを信頼していた。

たとえ本人が変わり者だとしても。  
ハセヲの大切な人が消えたときにはいなかつたとしても。

ハセヲが彼を疑うわけがない。

だから、ハセヲはここに来た。

ハセヲの大切な人をPKし、現実リアルで意識不明にした張本人。

トライエッジ  
三爪痕トライエッジを見つけ、大切な人を取り戻すために。

まるでハセヲの叫びに応えるかのように、聖堂の祭壇に蒼い炎が生まれた……。

## 第1話（後書き）

大分すつ飛ばしました。

Rootsを書こうかとも思ったのですが、あの辺りはほぼ同じなので捏造が入るG・U・本編から本格的に書こうと思っています。

まずは序盤、ハセヲがデータドレインを受けるまで。

次からはレベル1になりますね。

こう見るとかなり無茶かもしれませんね……。分かりにくいのは承知の上です。

あえてぼかしたところもありますが。

コメントを下さった方、この場でお礼を述べさせていただきます。

## 第2話

三崎亮。

都内に両親と3人暮らしで住み、有名進学校に通う高校2年生。

父親は有名会社の部長を勤め、何一つ不自由ない生活を送っている。

両親が共働きのためほとんど家に1人。

学校の成績は優秀だが、最近は下降気味。でもボーダーラインは保つていて。

部活は剣道部に所属しているが幽霊部員。まともに練習もしないため実力は未知数。

ルックスまあ平均以上で才色兼備、文武両道。苦手なものは見当たらない。

性格に難ありというわけではないのだが、友達は少ないというのが難点と言えば難点だろうか。

幼い頃は体が弱く、何度も入院を繰り返していた。しかし2年前を最後に入院はしなくなり、現在は定期的な通院に留めている。最近はそれとは別にとある患者の見舞いのために毎日病院に通っている。

それが、CCC社の調べた三崎亮のざつとしたプロフィール。

すぐに夢だと分かつてしまふ暗い場所。  
ハセヲはそこに佇んでいた。

『ミツケタ……』

暗がりの中に赤い点が3つ浮かぶ。

現れたのは死神。

生者を死へと導く存在。

「俺を、殺すのか？」

ハセヲがそう訊くと、死神は笑ったような気がした。  
顔なんて3つの赤い目しかないのに。

すると、死神が縮んだ。

見上げるほどに大きかった死神が、今ではハセヲと同じくらいの身長にまで縮んでいる。

姿形が変わった死神。

それを見てハセヲは息を呑んだ。

『俺は、お前だ』

死神が手を伸ばす。  
ハセヲは動けない。

人肌の温もりがハセヲの頸を撫でる。

『やつと届いた……』

その姿はまるで……。

はつとして三崎亮は顔を上げた。

「俺は……？」

記憶があやふやだ。

時計を見てから、カーテンから差し込む光を確認する。

午前6時。

まずは寝オチしたのかと思った。

不規則な生活の上に口クな食事も取つていない。両親が出張でいい今、食事はコンビニ弁当とカツラーメンで済ませることが多い。もちろん健康に悪いのは承知の上。

それからだんだんと昨夜のこと思い出す。

あの人そっくりなPこと出会い、それからかつてのギルドマスターからのショートメールを受け取り……。

「…… そうだ」

まだぼんやりする頭でいつの間にか電源の落ちたM2Dを起動させる。

慣れた手つきでパスワードとIDを入力した。

すると、まず最初に田に飛び込んできたのは『初期化完了しました』と二つの文字。

「…… はあ？」

思わず間抜けな声を出してしまつ。

初期化なんて操作をするはずがない。

ようやく頭が覚醒していく。

「…… そつだ、メール！ メンバー！ アドレス！」

嫌な予感は的中するもの。

メールもメンバー！ アドレスも空っぽだった。  
もちろん大切なメールも消えている。

「そんな……」

唇を噛み締め、亮はデスクトップに戻った。

そこから「The World」を選択。

そしてログイン。

鎖に繋がっていた死神が解き放たれた。

## 第2話（後書き）

まだまだ序盤ですね……。こんなペースでいいのやいか。  
ちなみに剣道部という設定は設定資料集からです。  
正式に採用されていたのかどうかは分かりませんが、一応公式です。  
それに、どこかのドラマCDで告白されて困つてるっていうような  
ことを漏らしてたような気が……。あれ？勘違いでしたっけ……？  
間違つても、どうか暖かい田で見逃してください。

### 第3話

確かに今のハセヲはレベル1だ。初心者と間違えられても仕方ない。

仕方ないとはいえる……納得できるかどうかは別。

#### 麗なる 先導の 巢立ち

どうしてこうなったのか、すでにハセヲに考える気力は無かつた。

オーヴァンらしき人がいたといつも同士の会話を聞き、ひたすらマク・アヌを進んだ。

しかし見失い……とある獣人Pことぶつかつたのだ。

とにかく適当に相槌を打ちながら、モンスターを倒していく。

「飲み込みが早いじゃん！」この調子で行こう！

「すごいんだぞ、ハセヲ～。このままじや、すぐに追い抜かされちゃうそうだな～」

#### ギルド『カナード』

初心者サポートを目的として設立されたこのギルドメンバーに、ハ

セヲは初心者と間違えられたのだ。

そりゃあもう、何度も否定してもこの2人は聞き入れない。

斬刀士のシラバスと魔導士のガスパー。

ギルドと言つてもメンバーはこの2人だけしかいなく、弱小もいいところだ。

2人のレベルも今のハセヲより少しましという程度。

それでも、今のハセヲよりレベルが高いことは確か。

今は大人しく、少しでもレベルを上げることに専念すべき。

そうでなければ、あいつに勝てない。

回式・芥骨を持ったのも実に8ヶ月ぶりだらうか。

「ねえ、ハセヲはどう思う?」

急に話を振られ、思い切りハセヲはシラバスを睨みつけた。

「何がだ」

「だから、PKのことだよお」

「僕達弱いから、いつも逃煙玉を持ち歩いてるんだけど……」

弱い奴は弱いなりに逃げる手段を持っているということらしい。

「あつ、そつかあつ!ハセヲ持つてないんだあ」

「そうだね!じゃあ、これ渡しとくよ」

シラバスから平癒の水と逃煙玉を押し付けられた。

「……貰つとく」

今は回復アイテムも貴重品だ。大人しく貰つておく。

「とにかく、PKに会つたら逃げる!相手はレベルが高いからね、敵いつこないもん」

「中にはあ、カオティックPKつていって、賞金がかかつたPKも

いるんだぞ。全部で7人いるんだけど、全員すつ“ぐく強いんだあ”  
「賞金を手に入れるためにはクエストをクリアする必要があるんだ  
けど……まだ適正レベルまで遠いね」

苦笑するシラバス。

「でも、カオティックPKじゃなくても強い人は強いからね。あの  
『死の恐怖』とか……」

その当人が目の前にいることをシラバスとガスパーは知らない。

「『赤い稻妻』って人とか……」

ガスパーがその名前を言つたとたん、ハセヲは内心で舌打ちした。

「あと……『黒い……』……なんだっけ?」

「どうでもいいだろ。さっさと奥へ行こうぜ」

無駄話に付き合う暇はない。

この苛立ちを次に見つけたモンスターで晴らすと決めた。

### 第3話（後書き）

お久しぶりです。待つていてくださる方がいればいいのですが……。  
シラバスとガスパー登場です。次回にはあの人達も。

このペースで行くと、完結するのはいつになるのやら。

## 第4話

獣神殿の宝箱をハセヲが開けようとしている、背後から気配がした。

「久しぶりだねえ～ハセヲくん　」

嘲るような声。

見なくとも覚えてる、ボルドーとネギ丸、グリンの3人だ。

「こいつら……ケストレルだ！」

「え？え？なんなのこの人たち？！」

「PKだよ有名な！」

ハセヲの横でシラバスとガスパーが言い合つ。

「しばらく見ないうちに、ずいぶんしょぼくれちゃったのねえ？」『死の恐怖』サマだと氣付くのに、時間がかっちゃったわよお』

ボルドーが嘲る。

「ええっ！？本物～？」

「ホントーにホントーの『死の恐怖』？」

驚いて2人がまじまじとハセヲを見た。

「……だから、言つただろうが」

ハセヲは溜め息をついた。

何度も言つた。その度に笑われたが。

「こんなところで出会うなんて、スッゴイ偶然　もしかして、私たちって赤い糸で繋がってる？」

「はっ、そんなのこっちから願い下げw」

「こっちもだよバーク！とりあえず……ズタズタに愛してあげる！」ボルドーが刀を抜いた。

ディスプレイ越しにでも分かる剥き出しの感情……殺氣。  
その殺氣こそハセヲを“ハセヲ”たらしめるもの。

肌で感情を感じるのが楽しくて嬉しくてたまらない。

もつと もつと

その剥き出しの感情を味わわせてくれ……！

「ななな、なんだかよく分からないけど……。乱暴なことはやめ  
」

頭を抱ええ、無謀にもガスパーはボルドーを止めよつとした。

それに容赦なくボルドーは刀を振る。

「あひや あつ！」

「ガスパー！」

1撃でガスパーのHPが0になる。悲鳴を上げたシラバスが、慌てて黄泉返りの薬を使つた。

その光景にハセヲがはつとする。

なぜかその光景が気に食わない。

どうしてだ？

無関係な奴らを手にかけたボルドーが許せないからだ。

許せないならどうする？

相手の方がレベルは20以上も上。勝ち目はない。

逃げようにも、タウンに戻るためのカオスゲートはボルドー達の後ろ。導きの羽を使用する暇をとれてくれるとは思えない。

それなら、迷うことはない。

HPが0になるのが怖い?  
負けるのが怖い?

そんなもの、ゲームの世界で『えられた擬似的な『死』に他ならない。  
たかがゲーム、死んだつていい。

死ぬよりも怖いもの。

大切な人を守れること。

逃げるよりは死を選べ。

違う、

死を与えるのだ。

俺は、『死の恐怖』

『死』を与えるために産まれた

。

“ハセヲ”の意志に従い回式・芥骨が具現する。  
レベル1用の、最弱の双剣。

「はつ、やろうつてのか？」

貧弱な装備を見て、ボルドー達が嘲る。

馬鹿にして見ている。

今すぐその首を刎ね脊髄を啜り脳を喰らつてやる。

“ハセヲ”が晒う。

さあ、俺の意思に従え！  
事象を具現化せろ！

必要なのは意思 純粹な感情。

相手を殺すという、一途な殺意。

それが死への第1歩。

狂氣へ身を落とせ！

狂つて狂つて狂つて狂つて狂つて ！

その瞬間“ハセヲ”はこの世界に現れる。

ここはゲームではない、“現実”だ。

さあ、相手に本物の死を……！

「や！」まどよ、

望まぬ第三者の声が割り込んだ。

## 第4話（後書き）

ボルドー姉さん登場。ネギ丸、グリンのセリフがありません。  
さて、次の投稿はいつになることやら……。1ヶ月に1回を目標し  
ています。

## 第5話

やがて、と。

蛇が鎌首を持ち上げるよ！」。

『……タ・ケ・シ・ジ・リ』

捕らえた。

「の7年間手を伸ばしても届かなかつた存在に。

そもそも自我が形成されたのもここ最近のこと。

産声を上げても存在を無視され、見えない壁に阻まれ。

その壁が壊れた。

壊された。

無意識の中で形成されていた壁が何者かの手によつて壊された。

好機。

今や“彼”は「」の中に入り……。

「ナリもどよ

第三者の声で、ハセヲは我を取り戻した。

今、自分は何をしようとしていた?

簡単なこと、「」のケストレルの連中に死を……。

そつだ、俺は何を檻から出でたとしていた!?

あれは表に出してはいけないもの。

内に潜むはどんな生物でもまず最初に求めるもの……生への渴望と  
対極にあるもの。

2年も前に喪っていた死神。

(捕まつた……?)

考えるだけで身體いがする。

耳鳴りがする。

詫まわしいハ長音調ラ音。

(ビリヒテ……!?)

M2Dを外し、周囲を見回す。  
見慣れた、自分の部屋だ。

他に誰もいない。

本当に……?

動悸が激しい。

「う、あ……」

その声はマイクに拾われることがなかった。

嫌でも昔のことがフラッシュバックする。

「俺は……」にじる……？」

「ハセヲ……大丈夫？」

うずくまっているハセヲをシラバスが支える。

「……ああ」

ハセヲは一度頭を振り、意識を覚醒させようとした。

「助けてくれて、ありがとうなんだな~」

露出の高い闘拳士にガスパーが礼を言った。

「アンタがハセヲね？」

女性がハセヲを見下ろす。

視線が気に食わない。

力の入らない体を叱咤し、ハセヲは立ち上がった。

「あんたみたいな奴に名乗つた覚えはないんだけど?」

「へえ……噂通りのきかん坊って感じね」

「何、アンタ俺のファン?」

「残念ながら、ガキは趣味じゃないの」

「あつそ。そりやよかつた。俺もオバサンには興味ない」

「オ、オバ……」

すると分かりやすいほどあからさまに反応する。

「『きかん坊』とか『趣味じゃない』とか、言い回しがどつかオバサン臭い……」

「失礼ね! こう見えて私は……!」

「私は？」

「…………」

沈黙。

「……出直した方がよさそうね」  
女性が踵を返す。

「ご勝手に」

「ひとつだけ忠告しておくれ」  
まつすぐ女性はハセヲを見る。

「ハセヲ……あなたのPCには『危険な力』が秘められている」

「『危険な力』……？」

「自分のPCから巨大な『何か』が生まれるような感覚を覚えたことはない？」

その言葉に反応するかのように、内側でずくっと『何か』が蠢く。

「……まあいいわ。じゃ、また会いましょう」

今度こそ女性はダンジョンから転送されていった。

## 第5話（後書き）

遅くなつて申し訳ないです。  
とりあえずパイのシーンだけでも終わらせたかったので……。  
続きはまた次回。

## 第6話

「どうして俺だと分かったんだ？」

志乃と同型のP.C.が振り向いた。

「だつて、ハセヲさんはハセヲさんじやないですか」

その言葉は人知れずハセヲの胸を抉った。

『ああ、もう少しだつたのになあ……』

その、ひどく残念そうな声に心臓が高鳴る。

（黙れ……）

『どうして黙る必要があるんだ？ テメエだつて望んでるんだろ、力を一。』

（お前は……）

『認める。テメーの奥底に潜む狂気を！

俺はお前だ！お前の狂気は俺の狂気！あの人を斬り裂いた快感を！あの興奮を！忘れたわけじゃないだろ！？

何今更怖気づいてんだよ！その手でいつたい何人殺してきた！？『黙れ！』

思わず亮は大声で叫んでしまった。

「るせーんだよ黙れってんだ！ああそそき俺は忘れてねえあの興奮を！」

魔神となつて手にした鎌でPK達を屠つたあの快感を。

安っぽいグラフティを切り裂いても手応えがなくてつまんないけれど、それでも相手に“死”を叫ぶたという興奮を。

「でもな、これは俺の狂気だ！突然出てきたテメーの感情じゃねー！」

『……馬鹿か』

笑い声が耳の奥で響く。

『お前は俺だ。お前の感情は俺のもの。俺の感情は俺のもの。お前の狂気が俺を育てた。そして俺は暴れ足りねーんだよ。じゃねーか！』

なあ、なんで狂気を抑える！？こんなに暴れたいのに、どうしてそれを抑制するんだ！？昔のテメーはあんなに狂気に忠実だったじゃねーか！

「あれは楚良だ！ハセヲじやねーんだよ！ハセヲは楚良じやない！」

ハセヲは楚良に成りえない。

亮が楚良に、亮がハセヲに成ることはあるてもハセヲは楚良にはならない。

それが、『ハセヲ』を作ったときに決めたルール。

「この感情は楚良のもの！ ハセヲじゃない！」

『この狂氣は楚良のものであり、ハセヲのものであり、亮のものであり、俺のもんだ！ 俺は亮、俺はハセヲ、俺は楚良！ ヒヤハハハハハハハハ！』

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！」

亮が何度も叫んでも笑い声は耳の奥にこびりつく。

「俺は俺だ！ 俺は……！」

叫びは悲鳴。

『三崎亮って何なんだ？ テメエも、俺もひつぐるめて三崎亮だぜ？』

「俺は……！」

ハセヲさんは ハセヲさんじゃないですか

「俺は……」

俺ハニニ—イル？

## 第6話（後書き）

ハセヲ＝三崎亮のはずなのに、それが分からぬ。

ハセヲはハセヲ、なら“俺”は誰？

……ひょっと病んでますね。

## 第7話

狂気が足りない。

志乃を助けられない

もつと狂わないと。

本当に?

志乃を助けるために狂うの?

狂うんじゃない。もう狂ってるんだよ

テメエは本性を出すために志乃を言い訳にしてるんだ

赤い3つ田が迫る。

亮は飛び起きた。

気持ち悪い。

寝汗でシーツまでもぐつしょっと濡れてる。

「くそっ……」

舌打ちをし、亮は階下のダイニングに下りた。

当然ながら誰もいない。

いつの頃からだろうか、この家に自分一人しかいなくなつたのは。

朝も、昼も、夜も、この家には亮一人。

学校の成績さえ下がらなければ、亮を咎める人物はいない。

ケータイが振動する。

双剣士「楚良」<sup>ソラ</sup>

それは過去の亡靈の名前。

死神の依り代となり、『世界』をさまつた亡靈。

その「靈は未だにこの『世界』に存在する。

元は同じだったはずなのに、いつの間にか分かれてしまったもう一人の自分。

ハセヲは愛しい呪療士『志乃』のために狂氣へ墮ちた。

でも楚良は……？

「僕ちゃんにはカンケーないよ！」

声が弾んでいる。

「僕は僕。ハセヲはハセヲ。別人だし」  
ベツジン

『The World』では全てを偽れる。

そこに現実は関係ない。

たとえ現実<sup>リアル</sup>を持たない存在でも、『The World<sup>世界</sup>』は受け入れる。

0と1の世界で生きるものと、原子で構成された世界で生きるもの。その世界に垣根は存在しない。

『……そつか。なら邪魔をするな

「僕の邪魔をしないならね』

『……どこまでがお前のテリトリーだ?』

「さあ? そこまで教えるほど、僕ちんお人よしじゃないし~』

クスクスと笑うと、声の主は溜め息を漏らした。

## 第7話（後書き）

もうすぐ「エイケイ」の発売です。

楚良は出でこないんですね……。

## 第8話

従順なる 怒涛の 万妖

ウザい。

ビハビヒにんな奴の誘いに乗ってしまったのだらう。

田の前には、志乃と同型PCの「アトリ」

アトリが田の前にいるだけでハセヲの心に波を立てる。

志乃と同じ顔だから?

志乃と同じ顔でハセヲに語りかけるから.....。

何よりも三崎亮を可立たせるのは、アトリの口から語りれる『田の樹』の思想。  
ハセヲ

他人からの受け売りをまるで自分の考えのように話し、しかもそのことに気付いていない。

たつた1つしか見えていない『理想』を、たつた1つの正義のよう  
に振りかざし、破る者には鉄槌を下す。

まるで、R・1の『紅衣の騎士団』のよひ。

全てを受け入れるのがこのThe World!

その点で、ハセヲは『ケストレル』を受け入れていた。

(ムカつくなあ……)

たつた一つの枠に当て嵌め、はみ出す者を弾劾する。

協調を求められる日本では煙たがられる、「出る杭は打たれる」という構図。

それは亮が嫌いなものの一つだった。

双剣を握る手に籠る力を意識して抜き、ハセヲは何度も深呼吸をして気分を落ち着かせる。

アトリの言葉に耳を傾けず、すべて聞き流す努力をする。

それでも、一つ一つの単語が引っかかる。

耳障りな呪文。

ああ、ハ長調ラ音までしてきた。

それとは別の、耳障りな声も。

「あの……ハセヲさん……」

遠慮がちなアトリにハセヲは宝箱を開けてから目を向けた。

「何だよ?」

「あつち……。あつちの方から、何か聞こえませんか?」

「……そうか?」

心に波が立つ。

獣を解放しろという叫びが。

それとは別の『何か』の音。

「はい。こっちです!」

アトリが走つていってしまう。

無視しても良かつたのだが、ハセヲは何かに導かれるかのようにアトリの後を追つた。



## 第8話（後書き）

アトリが登場しました。

今回は割りと早めの更新です。もうすぐゲームも発売します。

最近一次創作の方にも手をつけました。

前々からネタはあったので、せっかくだから執筆してみよつかと。

そういうことですので、もし興味がありましたらそちらの方もご覧になつてください。

## 第9話

従順なる 怒涛の 万妖

獣神殿の裏。

そこに刻まれていたのは禍々しき紅の二角形。

トライエッジ  
三爪痕

「聞こえる……。向こうから……音が聞こえるみたい……」

「トライエッジ  
三爪痕が……ここに……？」

傷跡は夜のフィールドの中で禍々しく赤く光っている。

「トライエッジ……？ そういう名前なんですか……？」

地震が起きたのかと思った。

「なに……ー？」

傷跡に引き寄せられる。

転送された場所を見て、アトリが呟く。

「……」

「エルディ・ルー……」

ロストグラウンド  
死世所 エルディ・ルー

巨大な地底湖の中心には純白の樹大樹、フラドグドが。

2人の足は自然と地底湖に向かつた。

「でも、こんな地底湖があつたなんて。……ハセヲさんっ…あそこ  
に人が……！」

言われるまでもない。

フラングドの根元に青年PCがいた。

肩には猫を乗せ、AIDAのバブルを手で弄んでいる。

そのバブルを見て、ハセヲの肌が粟立つ。

アレハ テキ

本能がそれを認識。

「なんだろ、あれ……とっても綺麗……」

恍惚とするアトリに、ハセヲは言葉を返せないでいた。

あんな禍々しいものを纏わせているあの青年。

彼はハセヲたのことなど眼中にないらしい。

どうして背景であるグラフィックにどうして一般P.じがいる！？  
青年の肩に乗つてゐるネ「は！？」

あの……黒い泡は！？

「…………聞こえる…………。『音…………あの人の方から…………』」

アトリが耳を気にする仕草をする。

猫が鳴いて、青年があやした。

そしてハセヲ達に気づく素振りを見せずにフラングドの後ろへと回る。

「待つてくださいー！」

青年に詳しい話を聞いたとしたアトリが走り出す。

「アトリ！」

思わずハセヲは叫んだ。

「え？」

アトリが立ち止まり、ハセヲを振り返る。

その背後に大量の黒いバブルが。

とつさにハセヲはアトリを追いかけた。

普段は忌み嫌つもの。

アレは敵だ。

欲望の捌け口を求めていたスケイスが笑う。  
ハセヲ

(いいぜ……来い……！)

ハセヲ<sup>スケイス</sup>は進んで身を委ねた。

俺は、  
……！

「危ないぞ！ 止まれ！」

声が響いた。

## 第9話（後書き）

祝Link発売！  
ということで投稿です。次のアップがなるべく早くなればいいのですが……。

まるでスローモーションのよじにアトリが倒れる。

またハセヲの目の前で志乃<sup>アトリ</sup>が……。

それを見た瞬間、ハセヲは我を忘れた。

ソウ、それこそがハセヲがハセヲたる由縁。

もつと怒れ、憎しめ！

そうすればオレが……！

ハセヲの思考が入れ替わる。

表裏表裏  
からから  
裏表裏へへ

だが、それを寸前で押し止めたのは見知らぬ乱入者だった。

「下がつていろ！」

間に割り込んできたのは黄色い衣装を着た男のスチームガンナー

反射的に反発しようと、はっとしてハセヲは口を噤む。

忌まわしき禍々しき波。

「行つけえええ！！！！！」

彼の体に黄色い紋様が現れる。

「俺の、メイガス！」

全身の産毛が総氣立つ。

まるで世界が反転したかのような……。

「増殖」、メイガス。

まるで葉を連ねたかのような、細長い体形。

姿が異なっているが、面影がある。

何より内なる存在が同胞の存在に歓喜する。

元は同じ存在。

同じ母から生まれたモノ。

嫌な臭いが届く。

石油と、血が混ざったような臭い。

黒い泡バブルから生まれた単細胞生物がレーザーをメイガスに撃つ。

メイガスはそれを防ぎ、単細胞生物へと突進。

「うおおおおおおおおっーー！」

データを書き換える力。

存在を修正し、上書きし、無に帰す力。

データドレイン。

それが単細胞生物に放たれた。

悲鳴のような空気の震えがハセヲにも伝わる。

「無事かい？ おふたりさん」

裏返っていた世界が元通りに修復されていく。

乱入者がハセヲとアトリに声をかける。

すでにメイガスは消えている。

「……」

「……なんか、あんま歓迎されてないみたいだな」

ハセヲが無言でいると、青年は肩を竦めた。

「まあいいや。そつちの子。大丈夫?」

「……アトリ?」

小さく声をかけると、アトリが身を起こした。

「あれ? 私……どうじゅやつたんですか?」

「どうひて……」

「なんか……変なモンスターに襲われて……。すごい『音』がして……びっくりして、記憶飛んじやつたのかな……なんて」

(記憶が……飛んだ?)

ハセヲは青年をめる。

「なにはともあれ、間に合ひてよかつた」

「あなたは……?」

初めてアトリは青年に気がつく。

「俺……? ああ、ええと……。実はじつ社の調査員なんだ」

「システム管理の人? GMさん?」

「ま……似たようなもんかな。このヒリアのバグ通知を受けて、飛んできただけど……」

「あのモンスター、バグデータだつたんですか?」

「そう。データが修復されるまで、ここには近付かないでね」

(ふざけんな。あれがただのバグデータだと?)

データドレインを使うのがCCC社の社員?

納得がいかない。

だが、今はそれよりも気分が悪い。

「……行くぞ」

「……そうですね」

アトリも同意してくれた。

「おいハセヲ」

せつかくカオスゲートに向かおうとしたのに、青年が呼び止める。

「……GMはいちPCの通り名まで覚えてるわけw」

「いや。ただ、偶然にしちゃ出来すぎだなと思つてな

「偶然、か……」

（黙れ……）

偶然じゃない。

俺たちは惹かれあつ。

それつきりハセヲは振り返ることなく、カオスゲートを目指した。

第10話（後書き）

ようやくメイガス登場。

「なんか……すいこじとになつちやいましたね  
マク・アヌのカオスゲートに戻ってきて、アトリが微笑む。

その態度がハセヲの気に障つた。

「お前……のほほんと笑つている場合か！　1歩間違えばお前……  
！」

『泣かないで……男の子、でしょ……？』

大切な人が消えていく。

慌ててハセヲは頭を振つてその光景を追い払う。

「……ハセヲさん？」

ハセヲが沈黙してしまったのを見て、アトリが首を傾げた。

「……何でもない」

「……でも、こんなことになつて、迷惑かけちゃいました……よね  
？　あの……もう一度、チャンスを貰えませんか？」

真摯にアトリはハセヲを見つめる。

『瞳、逸らさないで。伝わるよ』

あの人と言葉の意味が何となく分かつたような……気がした。

それでなくとも面影を映してしまつた。「。  
でも中身は別物。

「……次誘うときは、経験地稼ぎのできるヒリアにしり

それなのに……邪険に出来ない。

「はい！」

アトリは満面の笑みを浮かべた。

それは入力されたモーションのはずなのに、やけにハセヲにはリアルに見えた。

M2Dを外し、亮はベッドの上に倒れこむ。  
仰向けて寝て、目を腕で覆う。

耳障りな音がする。

だんだんと近くなつてくる、ハ長調ラ音。

「メイガス……」

その名を呟いたとたん、亮の中で『何か』が疼いた。

同じ母から生まれた兄弟。  
同じ原型アーチタイプから生まれた同胞。

オレから生まれた息子。

「クソツ……！」

乱暴に身を起こし、足取りも荒く自室を出る。  
階段を降り、目指すはキッチン。

階下にはやはり、誰もいなかつた。

亮1人だけの家。

暗い家。

そんなの今まで気にしたことなどなかつた。

あの時までは。

「つ……！」

すぐに亮は薄暗い部屋の電気をつける。

とたんにライトが明るく部屋を照らす。

それからキッチンの戸棚から乱暴にグラスを取り、蛇口を捻る。

とたんに迸る水流をグラスが受け止め、水がみなみと注がれる。

それから水道水を喉に流し込んだ。

「……くっ、はっ……

気分が悪い。

窓から見える空は暗い。

暗闇を街灯が照らしている。

「……夜……」

先程ログインした時間さえ覚えていない。

「志乃……また、志乃を襲うつていたよ……」

モルガナ  
母から生まれし子。

妾執から生まれた哀れな子。  
碎かれても8つの欠片に分けられ、ただ母の命令に従うしかなかつた子供たち。

アーキタイプ  
その原型となつたのは地母神の怒りに触れた双剣士。

その妾執は、今も世界をさ迷つてゐる。

今日もまた、亮は病院にいた。

「……また来る、志乃」

七尾志乃。

ネットゲームのプレイ中に意識不明になつてしまつた女性。

原因は不明。

分かるはずもない。

7年前だって、解決したのは女神に選ばれた1プレイヤーだった。

だが亮には、あの時女神に選ばれた少年のような力を持っていない。  
むしろその時の負の遺産を抱えているまま。

だからって諦めるわけにはない。

亮は病室を後にし、毎日通つて いる道を歩いていく。

いつもなら志乃の見舞いのあとはすぐ自宅に帰り、The Worldにログインしている。

だが今日は違つた。

亮が向かつたのはとある診察室。

亮が顔を出すと、馴染みの看護婦がにっこりと笑う。

「三崎君、先生がお待ちかねよ

「はい」

律儀に扉をノックし、入室する。

「失礼します」

「待つていたよ」

中で待つていたのは脳外科医の黒貝敬介だった。

黒貝に示されるまま、亮は向かいのパイプ椅子に座る。

「顔色が悪いね。ちゃんと規則正しい生活をしているのかな?」  
「……」

亮は突かれきつた表情のまま無言を保つ。

「……君が七尾志乃さんのお見舞いに毎日行つてるのは知ってるよ。黒貝の言葉に顔色を変えるが、黙つて続きを待つ。

「……未帰還者、だつてね」

未帰還者。

8年前から起こつた症例。突然意識不明に陥り、目を覚まさないのだ。

原因は不明。

当時、判明しているだけで計6人の人間が未帰還者になつた。性別、年齢、住所……どれもがバラバラ。

ただ共通しているのは全員が『The World』をプレイ中に意識不明となつたこと。

その症状がまた起こつている。

今回もまた、原因は不明。

ただ『The World』の中では三爪痕トライヒッシュにPKされると意識不明になるという噂があつた。

だから亮はハセヲとして、死の恐怖と呼ばれるまでPKをし続けた。

「……もう、いいですか?」

「三崎君……」

困ったように黒貝は微笑みを浮かべる。

「先生には感謝します。……でも、これは俺が解決する問題ですか？」

そう言つと亮は席を立つ。

「三崎君……！」

黒貝の制止に、一度だけ亮は振り返る。

「もうすぐなんだよ、センセイ。だから止めるな」

「…………」

言葉を詰まらせた黒貝を見て、亮は笑みを浮かべる。

その笑みは、今の三崎亮を知る者からすれば考えられないような笑み。

現在の疲れきつて弱々しく、どこか儚させある笑いではない。

精力でギラついていて、何かを求めているもの。

それを黒貝は7年の付き合いで見破った。

「アリガトーゴザイマシタ」

鞄を肩に担ぎ、診察室を出て行った。

「…………」

黒貝は溜め息をついて、カルテを見る。

病名の欄には、脳外科医である黒貝には本来関係のない病名が書かれていた。

病院内を歩いていく亮は、すぐに表情を消した。

「……もうすぐ？ 何がもうすぐなんだよ……」

そんなの決まっている。

でも認めたくない。

吐き気がする。

耳鳴りがする。

ずっと俯いていた亮は、すれ違った車椅子の女性の顔を見ることはなかった。

## 第1・2話（後書き）

今回はリアルの話です。  
黒貝さんはもちろんあの人の。この辺りの設定は小説から拝借しました。

## 第1-3話

ケータイがメールの着信を知らせる。

無表情に亮はケータイ画面を開き、相手を確認する。

表示された名前は……火野拓海。  
亮とは7年前からの友人だ。

同じ年で、共に同年代に友人の少なかつた2人はすぐに意気投合した。

今では亮の数少ない、心許せる友人。

内容を読んで、亮は口元に笑みを浮かんだ。

とても凶悪な笑みを。

マク・アヌの傭兵地区にある@HOME前でクーンが待っていた。

「や、ハセヲ」

「……」

「……あ、あれ？ そんな怖い顔してどうした？」

「別に。とつとと『レイヴン』に案内しろよ」

「なんか、俺嫌われてる……？」  
「気のせいだる」

家に帰つた亮はクーンから来た『ハセヲ』宛てのメールを見た。内容はクーンの所属しているギルド『レイヴン』の@ホームにハセヲを紹介することだ。

だが用件がそれだけでないことをハセヲは知つている。

「えーとね、『@HOME』ってのはギルド『』といいつづつ用意されてる部屋なんだ」

「知つてる。ほら、ギルドキーくれ」

ハセヲだつて過去『黄昏の旅団』というギルドに所属していたのだ。ギルドの説明くらい受けなくとも知つていい。

「分かつたよ」

ハセヲが急かすと、クーンは苦笑してハセヲにギルドキーを渡した。

『レイヴン』の@ホームの中にはいつかの女性PCもいた。  
「セヒ、と。改めてレイヴンへようこそ、ハセヲ」  
「……この前のオバサン」

「…？？」

ハセヲの先にいたのはボルドーたちに絡まれたときに割り込んで  
た拳術士だ。

このパイという女性も『レイヴン』のメンバーだったのだ。  
即ちCC社の社員。

内で何かが歓喜で疼いている。

『増殖』のメイガスに『復讐する者』タル・ヴォス。ククク…  
…。

以前に増して声が大きくなっている。

このままじや呑まれる。

何を怯えている？　お前は俺、俺はお前だろ？

もう何度も念じたか分からぬことをまた繰り返す。

(黙れ)

「あれ？　知り合いだった？」

2人の間にわだかまる不穏な空気を無視し……もしくは気付いていないのか、クーンが割り込んでくる。

「知らないわよっ！」

ムキになつて女性が否定する。

「はは……（^\_^;） 彼女はパイ、『レイヴン』のメンバー。で、パイ……彼が」

「……なるほどね。俺の監視をしてたってわけだ」

パイもCCC社の関係者、というわけだ。

「でもオバサン、俺をお色氣で誘つても……年が年だけに無理Wリアルを想像すると萎える」

「なつ……！ ちょっと、クーン！ 『いつ叩き出して！ いくら『適格者』だからって！ こんなヤツに、私達の仕事は任せられないわッ！」

「それはハ咫<sup>ハタ</sup>が判断することだろ？」

「……ヤタ？」

どうやらハ咫とやらが『レイヴン』のボスらしい。

「ハ咫様の手を煩わせる必要は

何か言いかけたパイだが、口を噤む。

「……はい、来ております」

パイが独り言にしか見えないことをしだした。

どうやらビビンかの誰かと話をしているらしい。

「え？ 1人で…？ ようしいのですか？」

はつとしてパイがハセヲを見た。

「でも、彼は……。判りました」

通信が切れる。

「いらっしゃい……ハ咫様がお会いになるやつよ」

パイが階段を上がり、@ホームの奥へと続く道を示した。

「この先にハ咫様がいらっしゃるわ」

「……分かった」

ハセヲは一つ頷き、知識の蛇へと歩き出した。

@ホームの奥にあつたのは無数のモニター。

4つあるルートタウンやダンジョン、様々なヤツたちが逐一監視されている。

思わずハセヲはそれに見入ってしまった。

「知識の蛇によつこそ、ハセヲ君……」

部屋の奥に浮いている球体。

それの後ろにいたのは妖扇士ダンスマカブルの男性。

この男が『レイヴン』のギルドマスター、ハ咫。

「長い間、待っていた……。君が来るのを」

そして三崎亮の友人。  
リアルの名前を火野拓海という。

「……久しぶり、と言つておこつか」  
「ハジメマシテ、だ。間違えんな

遠い前世からの友人。

だが『ハセヲ』では初対面。

その辺りをすぐに八咫は心得た。

「フ……、そうだな。では三崎」

八咫が段を降りる。

PCの身長のせいでも見上げる形になつてゐるのに変わりはないが、  
ここに立場の違いはない。

「お前はどこまで掘んでいる?」

“ハセヲ”ではなく“亮”として、“八咫”ではなく“拓海”に  
答える。

“データドレインしたカイトそつくりのPC。未帰還者。黒いバブ  
ルのモンスターに……禍々しき波”

挑戦的に亮は拓海を睨む。

「ここはメイガスとタルヴォスを指揮下においている。こちら

スケイスも」

「……」

ハセヲ  
拓海は無言。

「……」  
「ううん、スケイスもここにメイガスとタルヴォスを宿すPCがいるわけがない。

CCC社はどうやってか、禍々しき波をコントロールしようとしている。

そして、スケイスとの因縁が強いハセヲをも指揮下に入れようとしているのだ。

「だから俺を“待っていた”……違うか?」

「フ……その洞察力と冷静さを少しは“ハセヲ”に分けてやればいいのに」

ハセヲの言葉にハセヲは苦笑する。

「そりゃー無理。三崎亮とハセヲは別物だ。……それで、説明しろよ」

先を促すと、ハセヲ拓海は鷹揚に頷いた。

「バグではないバグ……。本来『The World』には有り得ないはずの事象。しかし『The World』に確実に存在する現象……。我々はそれらを総称してAIDA、と呼んでいる

「アイ、ダ……」

「聞きなれない名称。

喰いてもハセヲの言葉は変換されなかつた。

ユーザーの言語を自動変換する辞書には登録されていない。

「Artificially Intelligent Data Anomaly

「人工的、知的データ異常……」

それぞれの単語の頭文字を取つたのだろう。

「今はまだ一般ユーザーには知られていない。現段階においてはその程度のレベルだがな」

「……三爪痕トライエッジはAIDAなのか?」

「可能性は、否定できない」

それについては、まだ調査中なのだろう。

未帰還者はAIDAのせい。

だが原因のAIDAはまだこの『The World』にいる。

仕方なく亮ハセヲは別のことを聞く。

「……CC社は何のつもりなんだ？　あわよくば以前のように事件を隠蔽しようつてのか？」

「……危険ハセヲは排除するのではなく管理コントロールするもの」

「だからハセヲも管理するつてのか？　理由は……スケイス？」

「その通りだ」

あつさりハセヲは頷く。

「三崎はスケイス因子に選ばれた『適格者』……。クーンやパイもその1人だ。AIDAに対抗できるのは、現状、『碑文使い』を置いて他にない」

「……それで、スケイスの力を借りたいって？」

力を思う存分揮える場所が提供されるというのだ。

『ハセヲ』の中で何かがぞくりと蠢く。

凶悪な笑みが浮かびそつになるのを抑えるのに苦労する。

それは俺を解放することでいいんだよなあ？

初めは頑丈に縛っていた鎖がここになつて壊れ、緩み、獣を解放しようとしている。

(テメエがいなきや志乃を救えないことがよーく分かった)

ハハハツ、まだ言い訳するか？……だがいいぜ、協力してやるよ。

『死の恐怖』の力、女神殺しの力、俺たちの力をなあつ！

「……いいぜ。『The World』の異変……AIDAはもちらん、傷痕、三爪痕<sup>トライエッジ</sup>のことを逐一報告しろ。そうしたらスケイスを出してやつてもいい」

火野<sup>ハセヲ</sup>が言い出す前に、亮<sup>ハセヲ</sup>が条件を提示した。

「……てつきり、三爪痕についての情報だけかと思ったが」「三爪痕だけって言つたらAIDA全体は分からぬだろ？因果関係が不明な現在、それだけじゃ情報が不足する可能性があるからな。

……あ、でもハセヲには三爪痕の情報だけでいい

「……いいだろつ。その情報は別ルートで送つておく。……だから、スケイスの力を振るつてもうつぞ」

亮<sup>ハセヲ</sup>がスケイスの力を使えると火野<sup>ホノ</sup>は確信している。そのことに亮は舌打ちをしたくなつた。

「……だけど、俺に指図すんな」

背後の気配に気付き、ハセヲはざわざいな口調で八咫に言つ。

「八咫様！」

パイが入つてきた。

「やはり危険です！　このような人間を……」

「……」

無言で八咫はパイを見る。

「オバサンは黙つてろつてや」  
もつこに用はない。

いることを。それに……スケイプを扱えるのは彼しかいない」  
パイにはハ咫の声に微かに笑みが含まれているよう聞こえた。

ハ咫のリアルである火野拓海と三崎亮に接点がないことをパイはC  
C社の調査報告書で知っている。

といふことはやはり、ハセヲに対する可能性を見出しているのか。

何より、スケイプは特別だ。

第一相スケイプの碑文使いたるハセヲもまた特別。

三崎亮を中心にして『何か』が動いていたことを、おぼろげ  
ながらパイは察した。

## 第1-3話（後書き）

拓海君登場。彼は割と羨妬されます。  
今回は割りと長めでした。

ここは原作と大分違います。

ハセヲ、初めて接客業を体験する。

もちろん本意ではない。

初心者支援ギルド『カナード』のメンバーであるシラバスとガスパーがハセヲにギルドショップを押し付けたのだ。商品の設定値段を確認するが、どれもが良心的。赤字覚悟なのだろう。

「あのう……  
『いらっしゃいませ』！」

「うなつたらもう白棄だ。

『死の恐怖』が笑顔で店番なんて絵にならない。

笑顔の裏ではシラバスとガスパーに呪いの言葉を吐いている。

ハセヲの笑顔はすぐに気難しいものに変わった。

視線の中に声をかけてきた客がない。

「……？」

何気なく視線を下にすると、……いた。

魔導士の少年だ。  
ウォーロック

ターゲットにしてお前を確認すると、朔望とこいつがここに。

「あの……ほく、ほしいものがあるんだけど……」

舌つたずらで、外見同様中身も若い……とこつより幼そうだ。

「『シロタエギクの花』……ありますっ？」

言われてハセラは商品リストを確認した。

「……一つだけあるな。6000GAPだ。どうするへ？」

「あ……お金、足りない……」

所持金を確認して、少年が肩を落とす。

「欲しいもんがあるなら、ちゃんと貯金しちきな」

「ためてたんだけど……。なくなっちゃったみたい……」

「なくなつたつて……。自分の金なら、使い道くらこ覚えてるだろ

？」

「わかんないよ！…………そのつまで、朔のばんだつたもの」

「朔のばん？」

「朔はお姉ちやんだよ。…………このPICO、きのつまで朔がつかってた

「…………要するにお前ら、一つのPICOを姉弟で交互に使つてるわけか

？」

「うん……」

時々あることだ。

兄弟で同じPICOを使つていたり、親が昔使つていたPICOを子供が継ぐというケースもあった。

「そんで、お前が貯めてた金をねえちゃんが使い込んじまつた、と

……ひでえねえちゃんだな！」

「……うつさん、いいの。どうせ朔の誕生日もうびにプレゼントをかうつもりだつたから」

「誕生日?」

「ふたごだから……ほくのたんじょうびでもあるんだけど……」

「誕生日か……」

ハセヲ<sup>亮</sup>の脳裏にある光景が過ぎる。

1人、ぼつちの誕生日。

親が帰宅するのを諦めたのは……一体いつだつたろつか。

明かりもつけず、自分で買つて来たショートケーキを頬張るだけ。ホールで買つても食べきれないから。ケーキを買つのも億劫になり、いつしか誕生日といつ記念日はなくなつた。

でも、姉には誕生日を祝つてくれる弟がいるらしい。

「……仕方ねえな……まけてやるよー。」

「ほんとにいいのー?」

「ああ……ねえちゃんとよろしくな

「うん! ありがとう!」

6000GPに満たない金額を受け取り、シロタエギクの花を渡す。すると少年は満面の笑みを浮かべ、走つていった。

「ほく、望つていうんだ! たりなかつたぶん、きつとかえすから

ね、ハセヲにいちゃん！」

望はそれだけ言つと、カオスゲートのあるドームへと走っていく。

「朔と望で……朔望か？」

名前はそういう意味だつたらしい。

朔望……策謀。

何か作為的なものを感じるが……問題はないだろ？

今は、まだ。

## 第14話（後書き）

望登場)。

ハイペース更新もそろそろ息切れかも……。

シラバス、ガスパー、アトリといふとペースを乱されっぱなしだ。

初心者支援ギルド『カナード』に入るのことを承知したが、ギルマスになるとはいっていい。前マスターであるシラバスに押し付けられたのだ。

しかも聞けば、元々『カナード』を設立したのはクーンらしい。

憑神。アバター

女神殺しの力。

それを今、あの女神が調停している世界のためにその力を振るうなんてなんて皮肉だろう。

女神を疎んだ地母神の使いが、今や人の手先。

『G・U・』

レイヴンの隠れ蓑。

拓海から「個人的な連絡手段」を通じて手に入れたファイルには7年前の事件のことが書かれていた。

番匠屋ファイル。

*Grow Up* “成長”

*Graceless Unison* “「神」に見離された調和”

*Geek's Utopia* “ハッカーたちの楽園”

*Guilty Universe* “罪深い世界”

*Genesis of Ultima* “究極の創世記”

*Guardian Ubiquitous* “遍在を守護するもの”

*Gateway to Utopia* “理想郷への門”

*Gathering of the Unwilling* “不本意な収集物”

*Genetics of the Unknown* “それは未知数の遺伝学”

*Genocide of the Unfaithful* “不誠実の集団虐殺”

*Generation of Unity* “美しき統一の世代”

*Guide to an Uprising* “動乱への導き手”

*Gate of Uroboros* “無限の扉”

『レイヴン』とはカラスのこと。

ヤタガラス  
三本足の鳥。  
道案内をする神の使い。

「皮肉だな」

小さく亮は呟く。

「だけど……手がかりは手に入れた」  
志乃を救うための。

リアルで亮はコントローラーを机に置き、拳を握り締める。

違つ。力を正々堂々と使える場所を、だ。  
お前の中の狂氣を解放できる場所を、だ。

「テメエは大人しくしてろ」

ああ、いいぜ。俺たちは暴れられたらしいんだからな。

「お前だけだ。俺たちじやねえ」

ハハツ、強情だなあ。

それつきり、声は聞こえなくなつた。

亮は目を閉じ、意識を沈める。

闇が大きく顎を開いている。

目の前が暗くなる。

闇に呑まれる。

『クスクスクス  
.....』

笑い声が響いた。

そこは自由な世界だった。  
だが同時に窮屈な世界だった。

「スケイス……！」

忌まわしき名をあえて口にする。

「イニス、メイガス、フイドヘル、ゴレ、マハ、タルヴォス、コル  
ベニク……！」

モルガナからアウラに向けられた、自由を奪つための8本の鎖。  
母 娘

それが自由意志を持ち、今では世界をさ迷い思いの場所で遊んでいる。

「さて、役者は揃つて脚本家は何をするつもりなんだろうね」  
喉を震わせ、世界舞台を見下ろす。

「昔のオトモダチだけど、今はオットモダチじゃにゃーい！」

そう宣言し、彼は世界から姿を消した。

## 第1-5話（後書き）

やはり更新速度が落ちります。

LIVE劇奏前にもう1、2話は更新したいです。

仮眠するだけのつもりが、いつの間にか眠り込んでしまったらしい。ケータイの日付は翌日を示していた。

「チツ……

舌打ちをして、亮は反動をつけてベッドから起き上がる。

「……俺、ベッドで寝たっけ

それすら覚えていないほど眠かつただろうか。

……こや、違う。

溜め息をつくと、空腹を覚えた。

『ハセヲ』にではなかく『亮』にメールが届いている。

送信者：火野拓海

件名：無題

『ハセヲ』にはまずスケイスを使いこなしてもうつもりだった。

だが君には意味のないことだらう。

AIDAに関して、実を言つとまだ我々は何も掴んでいないのに等しい。

そこで、だ。

ルミナ・クロス。

アリーナ  
鬪宮のことは当然知つてゐるな？

現富皇エンデュランスの戦いを一度見ておきたまえ。

「現富皇<sup>チャンピオン</sup>つつつたら……ルク、じゃなくてエンデュランスじゃね

一か

本名一之瀬薰。

R・1のときは呪文使いとしてプレイしていた。イリーガルの猫型P・C・M・Aと共にいて、その正体であるマハが倒されたことにより一時カイトを怨むものの、最終決戦にはカイトと協力した。

だが、2年前……。

「……っ」

あの“最期”を思い出してしまい、亮は息を詰まらせる。

「……くそつ」

何とか呼吸を整え、それだけ毒づいた。

依存対象を喪った彼は、もう2度と喪わないために杖ではなく剣を必要とした。

後方で援護をし盾を守るのではなく、前に立ち盾を守る盾を手指したのだ。

「……奴に何があるのか……？」

薰の連絡先を知らないわけではないが、連絡を取ったことはない。取ろうとも思わない。

「……行けば分かる、か

百聞は一見にしかず、とも言つ。

溜め息をついて、亮はハセヲになつた。



## 第1-6話（後書き）

更新が遅くなつて申し訳ありません……。また一ヶ月に一度のペースに戻ると思います。

## 第17話（前書き）

お久しぶりです。

## 第17話

闘争都市ルミナ・クロスはどのルートタウンとも違つ、ネオンの輝く街だ。

R:1でのカルミナ・ガテリカを思い出す。

「ふん……」

今までここに足を踏み入れたことはなかつた。

PKKハセヲにアリーナは関係のない場所なのだから。

「あれ？ ハセヲ、こんなトコで何してるんだ？」

「ハセヲはよくアリーナに来るの？ 参加したことはあるの？」

なんというタイミングか、シラバスとガスパーまでいた。そういうえばルミナ・クロスサーバーメンテナンスが終了し、ようやく解放されたばかりだった。

そのためによづやく入れるよづになつたルミナ・クロスにプレイヤーが集まっているかもしねりない。

「いや、ねーよ

「ええ～？ 本当に！？ あの『死の恐怖』が？」

「PKKとアリーナバトルは関係ないでしょ（^\_\_^;）」

「観客の見世物になつてランク稼ぐなんて、俺の性に合わねえし。

……お前らはよくアリーナに来るのか？」

「そんなんに来るわけじゃないよ。なんたつて今日は……」

「あ！ そろそろ、始まるんじゃないかな？」

「……タイトルマッチか」

「うん。行く、ハセヲ」

何故か2人と一緒に紅魔宮のタイトルマッチを観ることになった。

アリーナには紅魔宮、碧聖宮、竜賢宮といつも3つのクラスがある。まず初めに挑戦することになるのが紅魔宮、つまり1番レベルの低いランクだ。

今日は紅魔宮の富皇エンデュランスのタイトルマッチ。

挑戦者は最近頭角を現したランカーだというが、そこまでアリーナに興味があつたわけではないので詳しく知らない。

そして大歓声と共に現れたのが斬刀士……エンデュランス。

「……あいつが」

いつもミニアの後ろにくつついて回っていたあの氣弱な少年。

それはエルディ・ルーでアトリーと共に見たあの青年だったのだ。

アリーナで誰ともパーティを組まず、常に1人で戦い、常勝してきました富皇。

そしてタイトル防衛線が始まる。

エンテュランスはいつものように、まずは挑戦者の攻撃をただ黙つてかわすだけ。

だがその動きは滑らかで、とてもコントローラーで入力しているとは思えない。  
改造しても、<sup>チート</sup>同じまでの動きは再現できないだらう。

まるでそこには本物の人間がいるような……。

「……つまらないな」

エンテュランスの声がアリーナに響く。

「こんな戦いでは……『彼女』が退屈してしまつよ……」

音がする。

ハ長調ラ音。

それに嫌な臭い。

「これは……」

エンテュランスが光に包まれ……現れたのは……。

「『誘惑の恋人』……マハ……！」

頭痛がする。

「どうかしたのか?」

横のガスパーの声も耳に入らない。

他の者には目に入らない姿。

「消えてくれ…… キミたちはみんな、醜いただの人形だ……」

そのままエンデュランスはマハの力を使い、挑戦者を倒していく。

挑戦者もどうしてやられたのか分からなかつただろう。

運が悪ければ少しの間リアルで昏倒していくてもおかしくない。

そしてこれは、あたかもエンデュランスが挑戦者を『瞬殺』しているかのように見せる。

『憑神』  
アバタ

『碑文使い』にしか見えない光景。

それをハセヲは見た。

「す」「かつたねえ」

「つていうか途中から、全然ワケ分からん、つて感じ（ーーー）  
あれが上級者の戦い方なんだよね、きっと」

「ハセヲは……どうかしたのか？」

「……あいつ」

ようやく頭痛が治まつてくる。

「……なるほど。やつこいつとか」

あの猫は今もエルクと共にいる、ということだ。  
ハセヲはこれをハセヲに見せたかったのだらう。

そして知つていて放置……といつことばこの社はエンドュランスを  
管理下においていない。

「……ハセヲは流石だな w ちゃんと判つてるみたいだし

「そなの？」

「……あんなもん、戦いじやねえよ」

静かに、そうハセヲは毒づいて踵を返した。

「ちょっと……！」

「待つておくれよお！」

その後ろを慌ててシラバスとガスパーが追いかけるが、ハセヲの  
知つたことではない。

## 第17話（後書き）

実際に2ヶ月ぶりの更新です。申し訳ありません。  
別ジャンルに浮気中なもので。

そんなわけで取り扱いジャンルが増えたりします。

「待つてつてば！ ハセヲお！」

背後からガスパーの声がした。

立ち止まつたハセヲの視界の端に、見覚えのある後姿が掠める。

「……オーヴァン！」

思わずハセヲは駆け出した。

鬪宮の裏へと続く路地裏の途中にオーヴァンは佇んでいた。

「……やあ、ハセヲ」

「やあ、じゅねえよ」

何かが第六感に障る。

思えば初対面からそうだった。

初心者専門のPKにやられ、そこを助けられた。

それがきっかけでハセヲは『黄昏の旅団』に入つたのだが……。

あるはずもないアイテムとされている『キー・オブ・ザ・トワイラ

イト』を探すため、過去の遺物であるウイルスコアを集めたり……。

別にハセヲは『キー・オブ・ザ・トワイライト』が存在しないとは思っていない。

オーヴァンには、『ハセヲ』を惹き付けるものがある。

それは今も同じ。

だがなぜか、オーヴァンの異形の左腕が氣になる。

今まで意識したことは何度もあるが、調べようとは思わなかつた。

何故か嫌な臭いが漂つてゐるよつたな氣がする。

「オーヴァン……あんたは……」

聞きたいことが沢山あつて、感情が溢れそつになる。

「『三爪痕』。倒せなかつたか……」

その言葉に思わずハセヲは息を呑む。

「どうやら、もつと強い『力』がないと、奴には勝てないよつだ」「……」

脳裏を先ほど見たマハや、クーンの操る憑神のことが過ぎる。そして最後に思い浮かべたのは……白い死神。

「……畜生つ。このままじや……」

思わず、ハセヲは頭を抱えた。

「闘闘でHンデコラソスの戦いを見ただけ」

「……ああ。あいつは一体……」

「奴は満たされない想いを追い続ける者……。ある意味において、お前と同じだ。しかし、奴は……お前に足りないものを持っている」

オーヴァンはハセヲに背中を向ける。

「……なんだよ、それ」

「……その答えは、お前が一番よく知っているはずだ。……俺は、いつだつて待つていてる。お前が

「俺が……？」

「いや……」

「なんだよ？」

「……また会おう、ハセヲ」

そう言い、オーヴァンがログアウトした。

「つて、おい！ 待てよ、オーヴア……！」

叫びながら亮はオーヴァンの過去ログを漁っていた。

だがオーヴァンのことはロスト。今までどこにいたのか不明。

それはこれからも同じだろ？

「チツ……」

舌打ちをして、自分もログアウトしようとしたところ、背後から声がかけられた。

「ちよつと、アンタ……！ こんなところで向してんねん！？」

「お前は……」

それはハセヲも見たことあるやじだった。

カーソルをターゲットして名前を確認する。

### 朔望

間違いない、ギルドショップで会った子供だ。だが、あのときは様子が違う。

そういうえば、姉と同じPcを使っているといつていた。ということは今は姉の番なのだろう。

そして弟が望で、姉が朔と名乗っているわけだ。

「なんや、人の顔ジロジロ見て。キショイわあ！……あ、判った！ アンタもエン様目当てやろ！」

朔は何故か勝手に決め付けてくる。  
姉弟でここまで性格が違うのか。

「ダメ！ 許さへんよ！ エン様はウ・チ・と赤い糸で繋がってるんやから！」

勝手に赤くなる朔に、どう対応していいか分らない。

「おーい！ 急に走り出すからビックリしたよ  
「はふはふ……ふうう……（ - 一 - ）」  
シラバスとガスパーがようやく追いついて来た。  
「アンタら、うちのエ……！」

唐突に朔が言葉を切る。

その直前に、ハセヲの耳に何かの音が届く。  
そしてあの嫌な臭いも。

壁から黒い泡が湧き出たかと思つと、そこからエンデュランスが現れたのだ。

「エン様～！ お疲れ様ですぅ～！！ 今日もホンマ、最高の試合見さしてもらいました！」

その変わり身の早さにハセヲは感心した。

しかしエンデュランスは朔の言葉を無視し、ハセヲの前に立つ。「アンタ、何のつもりやねん！？ エン様はアンタみたいなカスが口きける存在とちやうんや！ とつととそこじどき」

ハセヲも朔の言葉など耳に入らなかつた

「……お前、ロストグラウンドでAIDAといったな」

「……」

エンデュランスは答えない。

だが聞いていないわけではなさそうだ。

ならば、ハセヲは質問を変えてみた。

「……さつきの憑神アバタとその肩に乗つてるネコ、関係あるのか？」

そこでようやくエンデュランスはハセヲに興味を示したらしい。

「……ふ～ん。キミにも『彼女』が視えたんだ。……だけどそれだけか。キミには『力』がない」

「なに？」

ハセヲが顔色を変える。

『力』がない、だと？

「『彼ら』を理解する心もない……。『視えた』といひで、大勢の中の1人には変わりない……」

ハセヲの頬にエンデュランスが触ってきた。

手袋越しの、人肌の暖かさと……奇妙な冷たさが伝わる。

「キミは何もできないまま年を取つて……。そして、死んでいくんだ……。可哀想に……かわいそう……カワイイソウ……」

何も出来ない？

どうしてそんな同情されなければいけない？

「この俺が……可哀想？」

駄目だ。

抑えきれない。

ふざけんな。

抑える必要もない。

「……へえ」

エンデュランスの手を払いのけた。

「この俺に、『力』が無いと言うのか？」「

その反応にエンデュランスは僅かに小首を傾げる。

「言つじゃねえか弱虫が」

「僕が……弱い……？」

「アンタ……！」

朔が何か言おうとしたが、ハセヲに見られて思わず口を噤む。

ハセヲは笑みを浮かべていた。

ただそれだけなのに、何故か朔は気圧される。

朔は気付かなかった。

これが『恐怖』という感情だということ。

「よつにもよつてこの俺に『力』がない、だつて？ 可哀想、だつて？ ククク……アハハハハハハ！」

絶えられなくなつてハセヲは腹を抱えて大声で笑う。

「言つたなエンデュランス！ あの、猫の後ろに隠れて何もできなかつた弱虫が！ この俺に！？」

「キミは……」

初めてエンデュランスが顔色を変えた。

「なら証明してやるよ！ あの恐怖を知らないアンタに、死の恐怖を教えてやるさ！ 猫がいなくなるくらいの恐怖に耐えられないんじや、本当に未帰還者になつちまうかもね！」

それから唐突にハセヲは笑いを引っ込み、エンデュランスを見据える。

エンデュランスは背筋が震えるのを感じた。

「俺はテメエみたいにペットじゃないんでな。……覚悟しとけよ、俺は『死の恐怖』だ。テメエらにこの鎌で刻み込んで、十字架で磔にしてやるよ！」

エンデュランスにではない。

これはエンテュランスが使う憑神<sup>アバタ</sup>……マハに語りかけているのだ。

ハセヲの手に当然鎌はない。こゝはルートタウンのひとつで、前のヴァージョンならいざ知らず武器が出せるわけがない。  
だとのうのに、エンテュランスはハセヲに底知れぬものを感じた。

まるで刃を首につきつけられているような感覚。

殺氣。

並みのPKでは決して太刀打ちできない威圧。

それをエンテュランスは受け……底知れぬ感情を抱いた。

「そんなニセモノに癒着してるようじゃ、また殺されるぜ？　あのネコのようにな」

エンテュランスの肩に乗る猫を見て、ハセヲは笑みを浮かべる。

エンテュランスもしばらくハセヲを見ていたが……やがてルミナ・クロスのネオンの中に消えていった。

「……フン」

朔も悔しそうに顔を背け、エンテュランスの後を追いかけた。

「ハセヲ……？」

ガスパーがハセヲの顔を覗き込む。

「……あ」

はっとしたように、ハセヲはガスパーを見た。

「無茶だよ！　エンテュランスにあんな啖呵切つちやつて！」

シラバスの言葉にハセヲが少し考えこむ。

「啖呵……？」

「でも、どうやって富皇と戦うの？」

「……富皇と戦うためにはトーナメントで勝ち抜かないといけないんだよな」

アリーナランカーとしてのレベルを上げて、そこでランクが1位にならなければエンデュランスには挑戦できない。

そしてトーナメントに参加するためには、アリーナランカーの上位16位に入らなければならない。

次のトーナメントまで時間も少ない。

「……何とかなるさ」

「簡単に言うなあ（^—^;）」

「レベルも20以上ないとキツいよ？ パーティも集めないと……  
幸い今夏休みだし、ぶつ続けでやればレベルも20くらい軽く超える。それに俺、パーティ組むつもりないし」

「ええ～！？」

そう言うと大袈裟にガスパーが驚いた。

「ハセヲ……パーティのメンバーが少ないと不利だつて知ってるでしょ？」

シラバスもハセヲの身を案じているらしい。

「1対多数は慣れてる。下手な奴と組んで足を引っ張られたくないしな……。それに、あいつは俺の手でぶつ飛ばす」「でも……ガスパーは極度の上がり症でアリーナはとても無理だけだ……僕なら協力するよ？」

その言葉に、ようやくハセヲはシラバスとガスパーを見た。

「……お前ら、何でそんなに俺に関わるんだ？」

それはずっと気になっていたこと。

どうしてレベル1の、『死の恐怖』とまで恐れられているPKKに  
関わらうとするのだろう。

「何でつて……」

困ったようにシラバスとガスパーが顔を見合させた。

「……元々俺はソロプレイヤーだし、口クな連携を知らない。パ  
ティなんて組めるわけないだろ」

「そんなことないよ！ ハセヲ、リーダーシップあるみたいだし…  
…！」

「……エンデュランスだつて1人だろ」

「エンデュランスは例外だつて」

「ハセヲはともかく、僕みたいなへっぽこが真似しても勝てるわけ  
ないよ（ -\_- ）」

「だから、俺が1人で戦うんだろうが」  
ハセヲが溜め息をつく。

「……とにかく、メンバーが必要になつたらメールしてよ」

「ああ、必要になつたらな」

恐らくメールはしないだろう。

## 第1-8話（後書き）

今回おもひ出すとある。Hンテコラシスとの出会いでした。

……映画館に行って・h a c k の前売り買わなきや。せめ

頭を抑えて、亮はベッドに倒れ込んだ。

「……くそつ」

ログアウトしたのはいいが、電源を消す気力もない。

記憶が途切れている。

エンデュランスに何て啖呵を切ったのか覚えていない。

頭痛を覚え、頭に手をやる。

「勝手に出てきやがって……」

そう毒づくが、聞いていたのは当然亮以外しかいない。

携帯電話が振動する。

出るのが億劫だが、相手が分かると仕方なく亮は通話ボタンを押し  
た。

「……はい」

『エンデュランスの戦い、見たな』

「ああ」

相手は火野拓海だ。

「……お前さ、『ハセヲ』<sup>(俺)</sup>をエンデュランスに焚きつけただろ」

『その通りだ』

あっさり拓海はそのことを認めた。

「てことはやっぱエンデュランスが誘惑の恋人の『碑文使い』だつ  
て知つてんだな」

『彼らしいと思わんか?』

「はつ、どんだけ執着してんだよ。あれから2年だぜ?」

CC社の火事から2年。

R・1のデータが消えてから、2年。

『……何かあったのか?』

亮の調子がいつもと違うことに気付き、巧みは訝しげな声になる。

「……エンデュランスに啖呵きつたとき、持病が出たのさ」

『……そうか』

しばらく沈黙が続く。

「……なあ火野」

『何だ?』

「お前、アトリって知ってるか?」

『アトリ……?』

「片仮名でアトリ。俺と一緒にエルディ・ルーにいた女呪療士」

『……ああ、いるな』

びつやら電話の片手間に資料を呼び寄せたらしい。

「……あいつが、音が聞こえたんだって」

『音?』

「従順なる 怒涛の 万妖 にある爪痕サインから音が聞こえたんだつて。……俺にも聞こえたから問題ないと思ってたけど、あれは『憑アバタガ神』の……A I D Aの音だつたんだ……。

なあ火野、アトリも『碑文使い』なんじやないか?』

『……そうだ』

ゆるゆると亮は息を吐いた。

『スケイスを含めてメイガス、タルヴォスをG・U・は指揮下に入れている。そしてイニスとマハが監視対象。……他のについては不

明だ。アトリーはイースだと思われている』

「……そつか」

死の恐怖 スケイス

惑乱の蜃氣楼 イース

増殖 メイガス

運命の預言者 タルヴォス

策謀家 ゴレ

誘惑の恋人 マハ

復讐する者 タルヴォス

再誕 コルベニク

それが凶々しき波の名前。

残るはタルヴォスピゴレ、そしてコルベニク。

G・U・は『碑文使いPC』で構成されるギルドだ。ならば、ギルドマスターであるハ咫も『碑文使いPC』ではないのだろうか。

CC社が用意できなかつたのか、それとも……。

そこで亮は思考を打ち切つた。

持たざる者には持つ者の苦悩が分からぬし、その逆も然り。

『……三崎、大丈夫か?』

「……ケツ、俺にこう仕向けたくせによく言つぜ』

携帯電話を持つ手に力が籠る。

「絶対にエンデュランスをぶちのめす。アンタは高みの見物でもし

てな

『三崎……いやハセヲ……』

亮はそれ以上拓海の声を聞く前に電話を切った。

「俺は……ハセヲだ……」

思考を切り替える。

ここにいるのは『三崎亮』ではなく『ハセヲ』

『死の恐怖』と恐れられたＰＫＫだ。

いや……そもそも『三崎亮』など、こりこれない。

「やつてやる……！」

決意を新たに、ハセヲはＭＺＤを手にした。

絶対に許せない。

あいつは俺のことを口にした。

だから仕返しをしてやる。

大勢の前で無様に地べたに倒れ伏した姿を晒してやるのだ。

翌日、気がついたらベッドで眠っていた。

「~~~~~」

頭が重い。

額に手をあててみるが、熱はないようだ。

気分が晴れない。

カーテンを開けてみるが、まだ日が昇ったばかりだろう。

「……ああ、そうか」

外の光景をまるで親の仇のように睨む。

それは『死の恐怖』と呼ばれたときよりも冷たく、しかし感情を感じさせないものだった。

「……行くか」

普段着からジャージに着替え、亮は自室を出た。

例え志乃を喪おうとも、亮には変えられなかつた習慣がある。

それは定期的な通院と、運動である。

最近はアウトドア引きこもりという言葉が生まれているが、亮はM2Dを持たず、純粹に走ることだけを目的としている。

この日課は7年前、ウイルス性麻痺疾患で半年以上も入院してから続けるようにしている。

そのお陰、というわけでもないのだが、2年前に入院してから大きな病気になったこともない。

30分以上も走りこんでから、家の近くにある公園での筋トレをする。

外見からは分からぬだろうが、意外と亮は筋肉がついているし、体力もある。

一度だけ、M2Dをつけたままジョギングをしたのだが、どうやらそれは亮のやり方に合わなかつたらしい。

感覚の問題なのだが、しつくりこなかつたのだ。

結局、どれだけ切羽詰つても、志乃を助けたいという焦燥に駆られても、この時間だけは削れなかつた。

その分校の授業時間を削っているのだが。

宿題も家でやらず、学校の休み時間で仕上げていた。授業中は睡眠時間。

そういうスタイルで亮は数ヶ月を過ごしていた。

だが夏休みに入り、睡眠時間は最小限になつた。両親がよく留守にするのをいいことに食生活も乱れに乱れている。

夏休みの宿題はほとんど手付かずで残つているが、亮にやる時間はない。

今日だつて、両親は帰つてこない。

いつもそうだ。

帰つてくるといいつつも結局帰宅しなかつたり、帰宅したとしても家には睡眠に来ているというよつたな具合だ。

一通り日課を終え、誰もいない家に入る。

シャワーを浴びて汗を流し、濡れた髪をタオルで拭きながら冷蔵庫の中身を物色。牛乳をコップ一杯呑み、運良く残つていたサラダを出す。

たまたま残つていた食パンをトースターに入れ、トーストが出来上がっている間に冷蔵庫から賞味期限ギリギリの卵を取り出し、フライパンに油を敷いてついでに残つていたハムを乗せて火をつける。卵を割り、半熟になつたところで火を止めた。

それを皿に盛り、リビングのテーブルに置く。

「いただきます」

ちゃんと椅子に座つてから手を合わせ、焼きあがつたトーストに齧りついた。

久しぶりにインスタントじゃない食事にありついた。

1人っきりの食事。  
1人っきりの家。

そんなのにもう慣れた。

「それでも俺は、ここにいる」

三崎亮

ここにハセヲはいない。

## 第1-9話（後書き）

伏線を張つていぐのは難しいです……。

1ヶ月に1度といつペースが確立していく中ですが、これからどんどん忙しくなってしまいます。果たしてちゃんと更新できるかどうか……。

なるべく更新できるよう頑張ります。

なんて冷たい目をする子供、だらうと思つた。

少年はこの世界を何も楽しめていない。ただ淡々と、「えられた役割をこなしているだけ。

そう思つととても放つてなどおけなかつた。

「帰つて來たぜ『The World』！」

そう叫んでログインしてきたのは和風の赤い衣服を着た重鎧士だつた。

亮が家に帰つて来たのはそれから1時間後。

早朝といえど、夏は暑い。

地球温暖化のせいでの、都内の気温は7年前よりも確実に高くなっている。

そういうえばリニアモーターカーがようやく開通するな、などと最近見たニュースを思い返しながら、ジャージを着ている亮は家を出た。

時刻はまだ5時。

昨夜も遅くまでハセヲのレベル上げをしていたため、寝不足なのは否めない。田にはうつすらと隈がある。

欠伸を噛み殺し、軽く準備体操。

しつかりアキレス腱も伸ばしてから、その田も亮は走り出した。

シャワーを浴び、タオルで水氣を取りながら服を着替える。

「あー、お早う亮くん」

「……母さん、帰つてたんだ」

どいつもやらシャワーの間に帰つてきたらしー。

「でも、すぐに会社に行かなくちゃ」

「また、しばらく泊まり？」

「ええ……」「めんね」

「別に。もう夏休みだし」

素つ気なく答へ、母親が買つてきたらしい大手コンビニチーンの

ビニール袋から食パンを取り出し、トースターに入れた。

「……亮くん、学校の成績は？」

それに關してはちゃんと電話で報告したはずだ。

にも関わらず、この日で確認しなければ気が済まないらしい。

このために、この母親は帰つて來たのだ。

「……ちょっと待つて」「

階段を登り、2階の自室へと向かう。

机の上に置きっぱなしになつていてる封筒を引っ掴み、リビングに戻つた。

「はい」

渡された封筒から一枚の紙を取り出し、母親はそれを不安そうに眺める。

「……成績、少し落ちたんじゃない?」

何を言いたいか分かる。

だがここで下手に言つと、この母親はヒステリーを起しそうなのだ。

「『めん。来学期から氣をつける』

「そう……？ 亮くん、もう高校2年生なんだから……」

「分かってる。『めん』

「本当に……？ ゲームを止めてくれる？』

ネットゲームを、止める？

あの世界から離れる？

頭の奥が鈍く痛む。

「……くん？ 亮くん？」

はつとして亮は右手を振った。

無意識に頭を押さえていたらしい。

「大丈夫？ 頭が痛いの？」

「……うん、大丈夫」

心配する母親を安心させるように笑みを浮かべ、こんがりと焼けた

トーストを取り出した。

「本当に大丈夫？ お医者さんには行つてる？ もしかして、また……？」

「大丈夫。先生のところには行つてるし、体も鍛えるようになつてから丈夫になつたんだよ？」

それでもまだ不安そうな表情を消せない母親だが、しぶしぶ納得したらしい。

「……そうよね。亮くんも子供じゃないものね。今日だつて走つてたもんね……」

「ほら、それより仕事の方は大丈夫なの？」

「あつ……！」

慌てて母親は朝食を食べ始めたのだった。

母親をわざと送り出してから、亮は自室のベッドにダイブした。

頭が酷く痛む。

『The World』を止めるなんて考えたこともなかつた。

両親とも亮がプレイしているネットゲームのことを詳しく知らないし、亮がプレイしていることを快く思っていない。

だが、そんなこと止めやうにはいかない。

頭が酷く痛む。

片手で顔を覆い、ひたすら頭痛に耐える。

指の隙間から虚ろな、焦点の合っていない目が覗いた。

「俺は……誰だ？」

しかし唐突に瞳が収縮し、亮は体を起こした。

「メール……誰から……？」

のろのろとした動きでパソコンの電源をつけ、デスクトップを開く。

受信メールは1件。

差出人はアトリだった。

## 第20話（後書き）

かなり遅くなってしまった。  
いつも立て込んでしまい……。忘れたわけではなかったんですが。

めりやく投稿しても、短いし結局ほとんど進んでないし……。

一ヶ月に一度が目標でしたが、達成できそうにありません。

## 第21話（前書き）

まずはこの度の震災で亡くなつた方の「冥福をお祈りします。

幸いにも私の家族、親戚は無事でした。こちらの被害といえば物の落下と停電くらい。東北に住む祖父母も怪我はなく、電話が通じて無事が確認できたときは本当に嬉しかったです。

私に出来ることは限られています。ですが、出来うる限りのことは協力していくつもりです。

「つざいんだよ！」

今までよく我慢していたと思う。

決してハセヲは我慢強い方ではない。

それがよく、数十分も耐えられたものだとハセヲは他人事のように  
考えた。

……実際他人事だった。

ハセヲと三崎亮は同一人物であり、別人なのだから。

三崎亮

アトリに「冒険しよう」と誘われた。

だが内容はハセヲが望むような経験値稼ぎではなく、『月の樹』の  
理念を一方的に語るだけ。

自らの理念を持ち、語るのは別に構わない。

だがこちらの価値観を無視し、押し付け、勝手に同志と思い込む。  
それが非常に耐えられない。

志乃と同じPCタイプで、志乃とは別のこと語るなんて……！

腹立たしくなり、亮はM2Dをむしり取った。

亮にとって自分の価値観を否定されることは自分の存在を否定される」と等しい。

アトリに悪気がない。だから腹が立つ。

他人の言葉をそのまま話すだけの、中身のない虚ろのくせに……！

白い、自室の天井を見上げ、亮は乾いた笑いを漏らした。

「はは、は……空っぽなのは俺も同じじゃないか……」

ソロで潜ることを選択したダンジョンは今のハセヲより高いレベルに設定されている。

ソロでダンジョンに挑むときの鉄則は、困まれないこと。  
必ず1対1の状況に持ち込んで、連續で攻撃を決めていく。マク・  
アヌで買い込んだ回復アイテムを早めに使用し、時間をかけてモン  
スターを倒していく。

「ふう……」

モンスターが消滅したのを見届け、双剣を消す。

肌にしつくつと、小さな棘が刺さるような感覚。

ハセヲは足を止め、振り返った。

「……何か用か?」

ゆっくりとハセヲは振り返った。

そこに立っていたのは、ガラの悪そうな男2人。

ブレイヤーキャー  
PK。

「うほつ　強気じやん」

「その強がりがどこまで持つか、楽しみじゃね」

二三崎亮は上唇を舐める。

ハセヲ

「丁度いいや。俺は今、機嫌が悪いんだよ」

このときのハセヲは相手とのレベル差をまったく考えていなかつた。  
それを知つてか、PK2人組が一ニヤニヤ笑いを浮かべる。

「へへ、ヤル気かよ」

「簡単に殺されるなよ？ 断末魔の叫びを聞くのが楽しみなんだからさ！」

「どつちが」

ハセヲも双剣を構える。

ひどく興奮しているのが自分でも分かる。

どこかで耳鳴りのような、耳障りな音が聞こえたような気がしたが  
それも遠い。

三崎亮としての感覚が消え、ハセヲの感覚が上書きされていく  
。

「ちょーっと待つた————！」

唐突に現実に引き戻された。

PKの背後に赤い和風の服を着た重鎧士が立っている。

「クリム……」

ハセヲの眩きを聞き、クリムが気安げに手を上げた。

「クリム……？ あの『赤い稻妻』のか？」

「くそつ、何でこんな所にいるんだよ」

クリムの登場に、PK2人は明らかに怖気づいていた。

『赤い稻妻』クリム。

R：1からの古参プレイヤーで、正義感の強いことで有名だ。PK行為を見つけて放つてはおけないタイプなのだろう。

「んで、どうすんだ？ 僕が相手になるぜ」

PKたちは顔を見合わせ……どちらかが転送アイテム『導きの羽』を使用した。

あつという間に2人の姿が消える。

「……んで、どうしたんだよハセヲ。その姿は  
「うつせえつ！」

八つ当たりで、ハセヲはクリムに切りかかった。

## 第22話（前書き）

遊戯王5d'sが完結してしまいました……。

結果は当然の如くハセヲの負け。といつより勝負にすらなつていない。

クリムはログイン時間こそそれほどないとはいえ、2年もかけてレベルを上げた実績がある。

対してハセヲはデータドレインによつレベル1にされ、よつやく15を超えたくらい。

負けるに決まつてゐる。

獣神殿の宝箱を開け、鼻を鳴らす。

「……しつかし、データドレインねえ」

「お陰で8ヶ月が水の泡 w それに……」

「それに?」

「……いや、何でもねーよ」

闘富のことと言つたらどんなちょっかいを出されるか分かつたもんじゃない。

「お前ヤ、次いつ暇?」

「イギリスだつけ?」

クリムは商社マンとして世界中を飛び回つている。ここ数週間ログインがなかつたのも外国への出張で、だ。  
確か今回の行先は……イギリスだつたはず。

そして律儀なのか、海外に出張に行くとよく土産を買つてくれるのだ。

「ああ。土産に紅茶買つて来たからよ」

「……別にいつでも。どうせ今夏休みだし、病院には毎日行つてゐるし。つつーかわざわざ土産なんていらねーよ」

「……そつか。志乃、だつけ?」

クリムが気まずそうに視線を逸らす。

「ああ。志乃是まだ戻つて来ない。だから俺は……」

「三爪痕トライエッジを探すつてわけか。……しつかし、まじりつゝしつかえか

? お前なら……」

「これは俺の問題だ。ハセヲ俺は関係ない」

「……悪かつた」

クリムは大人しく両手を上げる。

クリムは現実リアルと仮想ゲームを区別している。

だが反対にハセヲは区別をしていない。

しかし、『三崎亮』と『ハセヲ』は区別している。

だからこそ、クリムは不安なのだ。

「……だけどよ、お前はガキなんだから大人の力を頼れつてんだ」「ガキじゃねえよ」  
「17は充分ガキだ」  
「そりや、あんたから見れば誰でもガキだよな、オッサン」「るせつー、これでもまだまだ若いって言われてるんだぞ!」  
思わずクリムは喚いて、ハセヲの頭を小突いた。

「つて」

カナードの@ホームに戻ると、何故かアトリがいた。

「……………どういふことだ？」

仲良し気に談笑しているシラバスとガスパーを見る。

「アトリちゃん、『カナード』に入るんだって」

「榎さんに相談したら、ハセヲさんの身近にいてあげなさいって……。だから私、頑張ります！」

「何をだよ…………」

「お2人から聞きました！　ハセヲさん、アリーナに参加するんですね？　アリーナは『月の樹』でも認められます！　私も出来る限りハセヲさんをサポートしますから！」

何故、こうなったのだろう…………。

ハセヲは無言で頭を抱えた。

## 第22話（後書き）

番組の変わり目ですね。遊戯王は初期からのファンで、シリーズが完結するたびに悲しくなります。そして次の主人公に期待というか、ショックというか……。

遊星も最初は髪型見て「何なんだ〜！？」と思つたんですが、今は大のお気に入りキャラに。

でも次の主人公は……！？

とまあ、hackとは全然関係ない話です。

春休みということと比較的早い更新。この連載を開始させたときは1、2週間に1回のペースを目指していたのに……！

高校野球を楽しみながら、次話を書くことにします。

シラバス、ガスパーと出会ってからハセヲのペースは乱れっぱなしだ。

今だつてアリーナには1人で参加しようとしたはずなのに、何故かシラバスとアトリが待ち構えていた。

(こいつも、ずっと張り込んでたのか……?)

今は夏休みだし、ログインする時間もある程度決まっている。待ち伏せは可能だらうが……。

どうでもいいが、このチームのネーミングセンスは如何なものだろう。

名前を勝手に登録したシラバスとアトリを恨む。

チーム名「ハセヲチーム」なんて、そのままさげるしダサイだろ  
う!

そんなハセヲの突っ込みも、試合前の2人の緊張の前には意味がなかつたらしい。

初試合にアトリは緊張しつぱなしで回復や補助のタイミングがずれている。まあ、アトリ今まで戦闘らしい戦闘をほとんどしてこなかつたらしいので、これは当然のことだ。

最悪の場合、アトリを圈に使うことも考慮していたのだが、その必要はなかつた。

やはり初心者は初心者と組ませるらしい、相手のレベルはシラバスと同じくらいだった。

シラバスはレベルが低い割には引き際というものを心得ている。これは恐らくPCに襲われたときの対処なのだろう。意外にも善戦し、楽勝とも言えるくらいの試合結果だった。

「やりましたね、ハセヲさん！」

「あのなあ……あの程度の雑魚で喜んでどうする」

本来ならもつと数をこなしてランクを上げたいところなのだが、まずは初試合初勝利といふことで引き上げることにした。

もちろんハセヲはこの後レベル上げのためにログインし続けるつもりだ。

選手専用の転送ゲートからルミナ・クロスに出て、ハセヲは溜め息をつく。

「でも私、勝ったのが初めてで……」

「……そういえばお前、レベル低いもんな」

アトリはあまりレベルの高くないこのメンバーの中でも断トツに低い。レベルでいうならガスパーの方が高い。しかもアトリは、この前の冒険で分かつたのだがモンスターを倒そうとしないどころかラツキーアニマルさえ蹴ろうとしない。これでは経験値が稼げるわけがないのだ。

さうこうアトリに言葉を続けようとして……ハセヲは転送ゲートの前で待ち構えていた1人の男性PCに目を留めた。

「……太白、どうしてここに」

「私とて、紅魔宮のチャンピオンシップは見ていた。その後、君を見かけたのでね」

「……つけてたのかよ」

「まさか。エンデュランスが本来とは違う場所から出入りしているのは知っている。君のことだから、エンデュランスともめたのだろう?」

流石、お見通しらしい。

「ハ、ハセヲお……」

「この人と……知り合いなの?」

ガスパーとシラバスが恐る恐る聞く。

この2人は目の前のプレイヤーが誰か知っているらしい。

アリーナ  
闘宮にある3つのランクのうち最上級である『龍賢宮』のチャンピオン、太白。

「……森の住人、といや分かるか?」

「森の住人……?」

アトリが首を傾げる。

「森の住人っていうのはね、以前あつたソロ専用のクエストに挑戦したプレイヤーのことなんだよ」

「クリアできたのは極僅かなんだぞう……」

ハセヲは黙つてシラバスとアトリのパーティを解散させた。

「……お前ら、先帰れ」

「え?」

「俺はこいつと話がある」

何せチャンピオンの1人である太白がアリーナの前にいるのだ。しかも相手は『死の恐怖』ハセヲ。注目を集めないわけがない。

ハセヲが促すと、太白はアリーナの裏へと歩いていった。

誰も人がいないことを目視とマップで確認してから、ハセヲは太白を見上げた。

「つてことは、俺がアリーナに参加するつてこと気付いて何も言わなかつたのかよ」

「その話を、あの場所で持ち出してほしいか?」

「……イイエ、アリガトウゴザイマス」

棒読みで礼を述べる。

太白とは現実世界で7年前からの付き合いだ。

太白の本名は黒貝敬介。専門外の分野でありながら、研修医のときに亮りハビリを担当したときの縁で主治医となってくれた脳外科医。

ハセヲは顔を伏せ、息を吐く。

1拍置いてから、顔を上げた。

「……で、何の用ですか?」

“ハセヲ”としてはほとんど使用しない、丁寧語で太白に聞く。

「エンデュランスについて、だ」

無言でハセヲは空を仰ぐ。

ルミナ・クロスは常に夜で、ネオンの明かりが眩しい。

「……エンデュランスにチートの技術はない」「誰かが提供している、ということか?」

「ま、そうとうてもらつて構いませんけど……誰か、は聞かないでください。の人、引き籠りなんで現実では誰とも会っていないんですけど」

「……つまり、この『The World』で?」

「ま、その力も奪つてやるけどな」

ハセヲが太白の顔を覗き込むように見上げる。

“ハセヲ”は笑っていた。

それを見て、太白は背筋に寒気を覚える。

恐怖。

生物が誕生した瞬間から死ぬまで抱き続いている、『死』に対する感情。

このハセヲは『死』そのもの。

だがあつさりと、『ハセヲ』は笑みを引つ込んで太白から距離を取つた。

「そーいうことだから、アンタは黙つて觀戦してな。……あ、勢い余つて未帰還者が増えちまつたら、フォロー頼むわ」

「……それは、」

太白が声を絞り出したときには、既にハセヲはログアウトしてしまつた。

『イコロ』というギルドがある。  
アリーナ  
鬪宮の3つのランク、紅魔宮、碧聖宮、竜賢宮のチャンピオンのみ  
が所属できるギルドだ。

そのイコロの@ホームに立ち入りを許されているのは限られた者しかいない。

その限られた者の一人、PC名「大火」は@ホームに用意された個室のうち、竜賢宮のチャンピオン専用の個室を訪れた。

「よう」

「……あなたか」

大火はかつてのチャンピオンだ。だが大火を倒す挑戦者が現れず、自ら位を譲っている。

『イコロ』を創設したのも大火だ。

「おめえ、あの小僧と知り合いなのか？」

「小僧……？」

「ハセラつていう、ガキだよ」

「……ああ、彼ですか」

ガキという単語は彼には禁句だ、と思いながら太白は答える。

「彼も、森の住人ですよ」

「にしちゃあ、親しげじゃねえか？」

大火が今は亡き友『フィロ』から聞いた話と、太白と話していたハセヲの態度は全然違う。

何を話していたかまでは分からないが、そこまで険悪そうには見えなかつた。

それが大火には意外だつた。

「そう、見えましたか？」

「おう」

黒貝 敬介

それに太白は笑みを浮かべた。

あの時の彼は、『死の恐怖』<sup>ハセヲ</sup>ではなく太白井治医<sup>患者</sup>と接している二崎亮だつたのだから。

「……彼のことをもっと知りたいなら、直接話さないと無理だと思いますよ」

7年来の付き合いである黒貝敬介本人も、未だ彼については分からぬことが多いのだが。

「というわけで、オレがテメエの師匠になつてやる」

「何がというわけなんだよ！」

今日もまたアリーナに参戦していたハセヲは、突然現れた天狗のようなプレイヤーの言葉に思わず突つ込んだ。

誰だつて見知らぬPCからの第一声がこれだつたら突つ込みたくない」と信じている。

「テメエは分かつてない。アリーナの戦い方と、フィールドでのモンスターとの戦い方は全然違う！」

PKを相手にしていたのにどこかアリーナでの戦いがぎこちないのは、今までハセヲが圧倒的なレベル差でPKを薙ぎ払っていたからだろう。

『死の恐怖』の名は伊達ではないということだ。

PK100人斬りをしたという実力は、今はバグのせいかレベルが下がつてしまつたとはいえ健在。レベル差があるにも関わらずそれを物怖じせずに、それを簡単にひっくり返して順調にランクを上げている。

「だから、戦い方を教えてやるってんだ！……つておい！」

ハセヲは早々に見切りをつけ、この押しかけ師匠……大火を無視してNPCの受付嬢に次のバトルの申し込みをすることにした。

小学生の頃、亮は浮いていた。

早熟だつたためか、クラスメートたちと校庭でドッジボールやキックベースといった遊びをする気になれなかつたのだ。

学校で遊ぶより『The World』が重要で、放課後はすぐ家に帰つてパソコンと向き合つていた。

そのため小学校では内向的と思われ、中学、高校でも積極的に誰かと関わるうとは思わなかつた。

もちろん話しかければきちんと応対するし、行事にもそれなりに参加した。

今でこそネット中毒者シャンキと呼ばれているが、それだけだ。

つまり、亮はいじめといつものに関わっていない。

他人からどう思われようが気にしないし、他者に必要以上に干渉しようとしない。

「うわあああん、クーンさん！」

だから、ガスパーがクーンに泣きついても、どうすればいいのか分からなかつた。

きっかけは、ハセヲが紅魔宮に参戦を決めたから。

ハセヲが『カナード』のギルマスを務めているため、カナードの開いているショップで売り子をしているガスパーが、ケスト렐に所属するボルドーの仲間にいびられるようになつたのだ。

これがハセヲなら一步たりとも引かず、楚良であれば闇討ちをしていたであろう。

だが標的はガスパーだつた。

心優しいガスパーは、ハセヲに相談せずずっと耐えていたのだ。

でも元ギルマスであり、カナードの創立者であるクーンを見たとたん、限界が来た。

ガスパーは、ハセヲではなくクーンを選んだのだ。

そもそもハセヲはつい最近カナードに入つたばかりで、2人と知り合つたのもここ一週間ほどのこと。

付き合いの長さなら、クーンの方が長いに決まつている。

それでも、ショックだった。

そしてそう感じた自分に驚いた。

「……お前、何で『カナード』辞めたんだよ」

ハセヲに攻めるつもりはない。

でも、面倒見の良さそうなクーンがわざわざギルドを抜けてまでしなければならないことがある。

それが何なのか、ハセヲは知っている。

「……もしかして、AIDAの事件に巻き込まないようにするためか？」

「……ああ、そうだ」

それをクーンは肯定した。

クーンが守りうとしたものを、ハセヲは壊しかけている。

「……くそつ」

元々、ハセヲにギルドマスターをやるつもりはない。ただ押し付けられただけ。

そこまで愛着のないギルドの悩みを解決してやるほど、ハセヲはお人好しではない。

しかし、かといって泣いていたガスパーを放つておけるほど、他人に無関心ではいられなかつた。

「……こんなん、俺のガラじやねえのによ」

そして、自分の心理状態を認識できるくらい、亮は冷静だった。

やられたらやりかえせばいい、というのがハセヲの認識。だが今回標的となつているのはハセヲではなくガスパー。例えハセヲが仕返しをしても、その分ガスパーに跳ね返つてくるだろう。

そのときガスパーが耐えられるか……答えは否。

ケストレルによる干渉を止めさせたためこまどりすれぱいーのだろう。

「……何だよ」

見ると、クーンがニヤニヤとハセヲ見て笑っていた。  
「……いや～、案外ハセヲって面倒見いいんだなって

「誰がだ！」

「だつて、何とかしようとしてくれてるんだろう？」

「別に、そんなんじゃねえよ」

「またまた～」

やけに気安く、クーンはハセヲの首に腕を回す。

「とりあえず、少し付き合つてくれんね？」

そう言つて渡されたのは、ギルドキーだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9098h/>

---

.hack//G.U. Another World

2011年12月27日22時55分発行